慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	時間情報に関する一研究： テレスコーピングとタイムギャップ感(FOG)を中心として
Sub Title	
Author	下島, 裕美(Shimojima, Yumi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1998
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.48 (1998.) ,p.67- 73
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告：博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000048-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ものであると判断するものである。

心理学博士（平成11年2月26日）

甲　第1699号　下島(尾原)裕美

時間情報に関する一研究
——テレスコーピングとタイムギャップ感(FOG)を中心として——

〔論文審査担当者〕

主査　慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員　文学博士　小谷津孝明

副査　慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員　教育学修士　冨安　芳和

副査　慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員　文学博士　三井　宏隆

内容の要旨

本研究の目的　本研究では，我々が日常生活において経験する時間情報に関する記憶および時間感覚について検討する。日常場面における時間の記憶に関する現象として，テレスコーピングという現象がある。これは，ある出来事の生起時期を想起する時，昔のことは実際よりも最近に，最近のことは実際よりも昔に判断してしまう傾向がみられるというもので，望遠鏡で遠くをのぞいた場合に例えて，テレスコーピングと呼ばれている。

テレスコーピングというのは，正確な生起時期を知らない場合に，出来事に付随する時間関連情報から時間を再構成する際に生じる現象である。被験者が出来事の正確な生起時期を知っている場合には，その正確な生起時期を報告するわけであるから，時間の短縮，つまりテレスコーピングはみられないことになる。そして，テレスコーピングは，時間そのものが短縮しているのではなく，我々が時間を想起する際に生じるバイアスであるとして説明されている。

一方，我々は，ある出来事とその正確な生起時期を想起した際に，「もうそんなにたったのか」あるいは「まだそれしかたっていないのか」という感覚をおぼえることがある。これは，我々の感じている「心理的時間の長さ」と，カレンダー的な「客観的時間の長さ」とが一致していないために起こる現象であると考えられる。実際には「客観的時間の長さ」が経過しているにもかかわらず，「心理的時間の長さ」との間にずれが生じるのは，我々の感じる「心理的時間」が伸縮する可能性を仮定することによって解決できるであろう。本研究では，この「心理的時間の長さ」と「客観的時間の長さ」にずれが生じた際に感じるであろう，時間のずれ感覚を FOG (Feeling Of time Gap) と名付け，FOG の機序とその役割について検討する。

Table 1.　2種類の FOG

1.	想起年月と実際年月にずれが生じた結果生じる FOG （年月想起のテレスコーピングにより説明可能）
2.	想起年月と実際年月にずれが生じないにもかかわらず生じる FOG （年月想起のテレスコーピングでは説明できない）

また，FOG には次の2つの種類があると考える (Table 1)．まず，我々が実際の生起時期を知らなかった場合，あるいは想起時期が誤っていた場合に生じる FOG である。時間の再構成による生起時期想起においてテレスコーピングが生じ，実際とは異なる生起時期を想起した場合，実際の生起時期が自分が想起した時期よりも昔だったことを知ると，「もうそんなにたったのか」という FOG が生じると考えられる。同様に，実際の生起時期が自分が想起した時期よりも最近だったことを知ると，「まだそれしかたっていないのか」という FOG が生じると考えられる。この1つめの FOG は，従来のテレスコーピングによって説明が可能である。

2つめに，実際の生起時期を想起することができたにもかかわらず生じる FOG があげられる。例えば，阪神大震災が起こった正確な時期を知識として知っているにもかかわらず，それを意識した時に「もうそんなにたったのか」と感じるような場合である。この場合は，時間情報から生起時期を推定することはできているのだから，年月想起のテレスコーピングによりこの2つめの FOG を説明することはできない。

本論文の構成　本論文の構成は，Table 2 のようになっている。まず1章から3章は，それぞれ，時間記憶研究の意義，時間情報の記憶に関する理論と研究の紹介，本論文の目的と構成について述べている。第4章から第11章は実験であり，第4章から第6章（実験1から実験3）では，心理的時間におけるテレスコーピングについて検討する。第7章から第11章（実験4から実験8）

Table 2. 本論文の構成

1.	時間記憶研究の意義
2.	時間情報の記憶に関する理論と研究
3.	本論文の目的と構成
4.	実験 1: 直観的経過時間評価におけるテレスコーピング (I)
5.	実験 2: 直観的経過時間評価におけるテレスコーピング (II)
6.	実験 3: 直観的経過時間評価と年月想起プロセスの分離
7.	実験 4: 主観的経過時間と客観的経過時間の時間のずれ感覚 (FOG)
8.	実験 5: 自伝的記憶における FOG
9.	実験 6: 実際年月と想起年月のギャップを意識した際の FOG
10.	実験 7: 自己と FOG
11.	実験 8: 時間情報の記憶に関する「素朴理論」
12.	結論

は，FOG を中心とした実験である。実験 4 において FOG が生じる出来事の記憶特性を調べるとともに，2 つめの FOG の存在の確認を行なう。実験 5, 実験 6, 実験 7 では，2 つめの FOG の存在を更に実証すると共に，その要因と役割について検討する。実験 8 では，時間認識に関する「素朴理論」を調べることにより，我々の意識レベルにあがってくる，主観的経過時間が伸縮する要因について検討する。最後に第 12 章では，実験結果をふまえて，日常生活における時間認識の一側面について考察する。

実験 1 出来事の経験内容を想起する必要がないと思われる出来事（祝日等の慣習的出来事）を刺激として，現在からその出来事までの経過時間を，線分の長さによって評価した。

日付を正確に想起できる場合には，非常に正確な評価が得られた。また，日付を正確に想起できなかった場合は，ランダムに近い反応となった。このことから，出来事の経験内容の想起が伴わない場合には，日付を知らなければ，正確な経過時間評価が行なえないことが示された。

実験 2 出来事の経験内容を想起する必要があると思われる出来事，実際に個人的に経験した過去の出来事を刺激として，現在からその出来事までの経過時間を，線分の長さによって評価した。

実験 1 と同様，日付を正確に想起できた場合の長さ評価は，非常に正確であった。一方，日付を正確に想起できなかった場合の長さ評価は，実験 1 の慣習的出来事とは異なり，ランダムに近い反応となったわけではなかった。出来事内容の想起が伴う場合には，正確な日付を想起できない場合でさえも，ある程度正確な経過時間に近い長さ評価を行うことができた。

実験 3 実験 1, 実験 2 では，基準となる線分が 1 種類であったが，実験 3 では，基準となる線分に 2 条件を設けた。基準イベントは，国内で起きた出来事と国際的出来事の 2 つのうちいずれか 1 つであり，ターゲットイベントは国内で起きた出来事であった。

基準イベント-ターゲットイベントの関係が国内-国内の条件では，国際-国内の条件よりも，経過時間評価が実際より昔に偏っていた。基準イベントとターゲットイベントの概念的枠組みの違いによって，心理的時間の長さは変容するものであることが示された。

実験 4 客観的経過時間と心理的時間（主観的経過時間）にずれが生じた場合に感じる時間のずれ感覚を FOG (Feeling Of time Gap) と名付け，FOG が生じる出来事の特徴について検討すると共に，Table 1 に示した 2 つめの FOG の存在を検証した。ニュースイベントを刺激として，出来事とその生起年月を呈示し，FOG 評定（「1. まだそれしかたっていないのか」〜「4. そんなものだ」〜「7. もうそんなにたったのか」の 7 段階評定）を行ない，この FOG 評定値と出来事の記憶特性の関係について検討した。

経過時間が長く，鮮明度が高く，感情が強い出来事ほど，「もうそんなにたったのか」という FOG が生じやすいことがわかった。また，生起時期の確信度が高くとも FOG が生じたことから，2 つめの FOG の存在が示唆された。

実験 5 経過年月を正確に知っており，かつ，生起時期が接近している 2 つの出来事（高校卒業時期と大学入学時期）について，FOG の比較を行なった。

大学入学時期，高校卒業時期共に，「もうそんなにたったのか」という FOG 評定値が得られた。また，大学入学時期は，高校卒業時期よりも有意に高い FOG 評定値が得られた。ほぼ同じ時期の 2 つの出来事であっても，FOG は異なることが示された。また，実験 4 と同様，経過年月が長く，鮮明度が高いほど，「もうそんなにたったのか」という FOG が生じやすいことが示された。

実験 6 Table 1 に示した 1 つめの FOG の生起過程と 2 つめの FOG の存在を検証した。ニュースイベントの生起年月の想起を行ない，1 回目の FOG 評定を行なった。次に，実際の生起年月を呈示し，自分の想起年月と実際の生起年月のずれの有無を意識したうえで，2 回目の FOG 評定を行った。

実際よりも最近の生起年月を想起した場合には，2回目のFOG評定値は1回目のFOG評定値よりも有意に高かった。実際よりも昔の生起年月を想起した場合には，2回目のFOG評定値は1回目のFOG評定値よりも有意に低かった。実際と等しい生起年月を想起した場合には，1回目と2回目のFOG評定値に有意な差はみられなかった。このことから，想起年月と実際年月のずれを意識した時，ずれた方向へのFOGが生じることが示され，1つめのFOGの生起過程が確認された。また，実際と等しい生起年月を想起した場合においても，「もうそんなにたったのか」というFOGが得られ，2つめのFOGの存在が確認された。

実験7　実験7では，これらの時間に関する記憶を，自己と関連づけて説明することを試みた。「人生の転機となった出来事」を1つ想起し，FOG評定を行なった。そして，当時と現在とで，その出来事に対する捉え方が異なる群と，同じ群とのFOGの比較を行なった。

異なる群は同じ群よりも有意にFOG評定値が高かった。当時の出来事を，現在の自己の観点で捉えなおすことにより，主観的経過時間が短縮されたのだと考えることができる。そして，「現在の自己の観点で捉えなおす」ことを「自己更新」であると考えるならば，「自己更新」によって，自分の過去の記憶，つまり自伝的記憶の構成を能動的に変化させることができることが示唆された。

実験8　時間の想起に関する処理過程を論じる際，時間に関連する生活経験を総点検する必要もあるであろう。そこで実験8では，客観的経過時間と主観的経過時間の間に生じる時間のずれ感覚に関する「素朴理論」について検討した。

「実際よりも最近に感じる出来事」とは，自分が現在関心がある出来事や，自分と関連のある出来事であり，つまり「最近のこと」として捉えている出来事であった。反対に「実際よりも昔に感じる出来事」とは，自分が現在関心がなかったり，自分と関係のない出来事であり，つまり，「最近のことではない」あるいは「昔のこと」として捉えている出来事であった。

結論　以上の実験結果から，心理的時間は，主体の外界の捉え方によって，伸縮するものであることが示された。そして，2つめのFOG，出来事の正確な生起時期を知っていたとしても，心理的時間と客観的時間の間にずれが生じ，「もうそんなにたったのか」という感覚が生じることが示された。主体が「最近である，現在の自己と深い関わりがある」と捉えているものは，たとえ実際の生起時期を知っていたとしても，実際よりも最近に感じられるものである。「現在の自己を形作っている出来事」としてくくられた出来事群の心理的経過時間は，実際よりも短縮されており，客観的時間軸とは異なる主観的時間軸上に構成されているのかもしれない。

心理的時間は，出来事の特徴や経過時間など，外的要因によっても影響を受けるが，自分がその出来事をどのように捉えるのか，その捉え方という内的要因によっても変化するのであり，能動的に働きかけることが可能なのではないかと考えられる。「自己更新」によって，自分の過去の記憶，自伝的記憶の構成は変えることができることが示唆される。

論文審査の要旨

下島裕美君提出の博士学位請求論文『時間情報に関する一研究――テレスコーピングとタイムギャップ感(FOG)を中心として――』は，我々が日常生活において経験する時間情報の記憶および時間感覚に焦点を当て，①「昔の出来事はより最近に，最近の出来事はより昔に想起される傾向があり，過去全体としての時間が圧縮される」という，いわゆるテレスコーピング現象は，現在の説明では，我々が時間情報を再構成的に想起する場合に生じるエラーバイアスであるとされている。しかし，果たしてそうであろうか，また，②出来事の想起に際して我々はしばしば「もうそんなに経ったのか」「まだそれしか経っていないのか」といった表現に代表されるタイムギャップ感(FOG)をもつが，その生起機序はテレスコーピングといかなる関連をもつのか，③FOGを生じさせる出来事もあれば，生じさせない出来事もある以上，FOGは出来事の内容や時期と何か特別な関連があるのではないか，④同一の出来事に対して我々が自らのライフスパンのいろいろな時点において‘異なった’テレスコーピングやタイムギャップ感現象もつとすれば，それは我々の（自伝的）記憶が実際の体験時期そのままのコピーではなく，むしろ他の出来事との関わりの中で能動的な取捨選択や再構成が行われ，自己更新がなされていると解釈できるのではないか，⑤そうであれば，体験時期とは異なる観点で捉え直すであろう出来事として‘人生の転機となった出来事’に着目し，その捉え方とタイムギャップ感を調べてみる必要がある，⑥以上全ての結果は時間記憶および時間感覚に関する「素朴理論」（一般に持たれている知識・概念・法則）とはどういう点で対応しているか，等について，実験および調査を実施・解析し，その結果から，時間記憶と時間感覚の体制化およびそれが自己に対してもつ意味を論じたものである。

本論文の構成は全12章よりなる。以下に各章の概略を述べる。

まず第1章では，まず時間記憶研究の意義が述べられている。すなわち，日常我々が経験している時間は客観的，絶対的，一義的な時間とは異なり，我々なしにはあり得ない主観的，相対的，多義的な時間であり，我々の行為や出来事の認和に伴って生起する心理的時間である。したがって我々は認知され，記憶された出来事の断続的情報を構成・再構成することによって連続した時間をつくりだし，その時間に意味を付与することによって自己の過去の連続的一貫性――アイデンテティ――をつくり上げているものと思われる。時間情報の再構成はしばしば時間記憶の変容を生むが，再構成が個人的・主体的である以上，その変容はその個人にとっては意味のある筈のことである。テレスコーピングの研究の意義もFOGの研究の意義も正にこの一点にかかわって来る，と述べる。

次に第2章では，時間記憶研究の歴史的展望を行い，①従来自伝的記憶の研究において時間情報は余り重要視されて来なかったこと，②時間記憶に関連する範囲で，記憶痕跡理論，事象の時間的体制化理論，文脈重複理論，時間タグ理論，符号化混乱理論，再構成理論，連合連鎖理論，順位符号化理論などを瞥見した後，③幼児はその発達過程の大きな節目節目で複数の時間処理能力を獲得し，節目毎に場合によっては異なる時間軸に沿って記憶情報を体制化し，やがて全体を体制化するという著者らの実験的成果と理論を紹介している。④そのような場合も含めて時間情報の想起はある種のバイアスのかかったエラーが見られることがあり，その典型が，昔の出来事はより最近に判断してしまう順向テレスコーピング，最近の出来事はより昔に判断してしまう逆向テレスコーピングというわけである。⑤テレスコーピングについては，想起される時間が経過時間のベキ関数にしたがう形で圧縮されているとする説，ある出来事の期間の両端が知識として持つ境界の内側におさまるように判断してしまうとする境界効果，ある出来事の日付評定をする際に他の出来事がその日付内に侵入してくるために起こるとする説，日付情報の単位として週・月といった丸め値を使っているために長い経過時間ほど最近方向に大きく寄せて判断してしまうとするラウンディング説，出来事の想起しやすさと鮮明度の高いほどテレスコーピングが起こりやすいとするアクセス可能性説など，未だ一つに決着を見ていないが，これらの一つ一つを，適切に評価・批判しつつ，渉猟している。

第3章は，上記を踏まえ，本論文の目的と構成を，また，各章で展開される実験的調査研究については目的・方法・結果をほぼ要約に近い形で述べ，全体の見通しをよくした。

第4・5・6章はテレスコーピングの実験的研究である。従来のテレスコーピングの研究では出来事の生起年月を問う形式が多かった。本研究1・2・3では，出来事から現在までに経過した時間の直観的長さ（直観的経過時間）をコンピュータディスプレー上の線分を自由に伸縮操作させる方法で産出させる。ディスプレー上段には，参照用に現在から12ヶ月の長さを示す線分が引かれている。出来事（刺激）としては，まずよく知っている慣習的出来事，すなわち，過去1年以内の祝日20項目（祝日条件），同祝日の日付20項目（日付条件），および偶数月6項目（統制条件）が選ばれた。産出時間は特に制限しない。実験の結果産出された線分の長さを日数に変換し，各条件毎に実際日数への回帰直線を求め，回帰分析を行った。産出された判断が客観的に正確である場合には回帰直線は原点を通る勾配1の直線になるが，テレスコーピングが生じていれば切片が有意な正値をとり勾配が1より小さな直線になることが予測される。結果は，統制条件では原点を通る勾配1の直線が，日付条件，祝日条件では一見勾配が1より小の直線となったが，切片の大きさが有意でなく，また，祝日条件でその日付を知っていた祝日正答条件と全く知らなかった祝日誤答条件とに分けて回帰分析をした結果，前者では統制条件および日付条件とほぼ同様の直線を得たが，後者ではランダムに分散した。以上のことから，すくなくとも被験者が正確な日付を知っていた場合にはテレスコーピングは起こらない，全く知っていない場合には産出反応は当て推量になり，テレスコーピングなど問題外となる，と結論される。

しかし，上の祝日誤答条件はその日に関して想起内容が全く伴わないケースであった。そこで研究2では，日付の想起は出来なくても（すなわち誤答条件でも）その日に関してある程度想起内容があるケースをとり上げることにし，祝日の代わりに，個人的な今後4過間の予定を聞いておき，2週間してから1日前，2日前，･･･14日前を（統制条件），過去に実行した予定（予定条件），および実行した予定の日付（日付条件）を提示して，それぞれの現在までの直観的経過時間を線分の長さで産出させたところ，今度は予定誤答条件の回帰式は切片が有意に大きく（逆向テレスコーピング），直線勾配は7日以

後で直観的経過時間をより短く判断する傾向（順向テレスコーピング）を示した。つまり，出来事の生起した正確な日付は知らなくても，経験内容がある程度想起できる場合にはテレスコーピングが見られたことになる。

ところで研究1・2では長さ産出に関して時間制限がない。これでは直観的経過時間と言っても，出来事の生起年月を想起し長さに換算する計算方略を使用していて，‘直感的経過時間’とは言えない可能性がある。そこで，研究3では産出時間を10秒以内に制限し，‘真の’直観的時間感覚つまり感覚的・知覚的処理においてもテレスコーピングが見られるかどうかを検討することにした。今度は質問紙上に15 cmの線分が4本引いてあり，その右端に「現在」と書いてあり，そこから12 cmのところに基準出来事の時点を示す印と出来事名（「湾岸戦争勃発」もしくは「雲仙普賢岳，火砕流発生」）が書いてある。この長さを基準にして，被験者はこれから読み上げられる出来事までに経過したと思われる長さを判断してその時点の印を付けるよう教示された。読み上げられた出来事は「奥尻島地震で壊滅的被害」「阪神大震災」「高速増殖炉「もんじゅ」ナトリュウム漏洩事故」「北海道古平町で岩盤がトンネル直撃」の4つである。結果は，①ほぼ，「古平」と「もんじゅ」は入れ替わるが）古い出来事が現在に近く，現在に近い出来事がより昔のほうに判断され，テレスコーピングが見られた。②しかも，これによりテレスコーピングは，基本的には，感覚・知覚処理の段階での現象ということになる。③本実験では同時に，これら出来事の生起年月そのものを答えさせているが，それから得られた想起出来事経過日数の上でも，上記の結果は確認されている。

さて，このように直観的経過時間や想起出来事経過日数の評価値が実際の経過時間や経過日数との間にズレを生じた場合，しばしば「もうそんなに経ったのか」とか，「まだそれしか経っていないのか」とかいった感覚が生じる。本論文では，こういった感覚をタイムギャップ感(feeling of time gap, FOG) と名づけた。

そして第7章で，このFOGが2種類存在することを指摘する。その1つは，想起時期を問われて正確な生起時期を知らぬままテレスコーピングが生じてしまって実際とは異なる生起時期を想起した場合，それが実際の生起時期よりも昔だったことを知ると「もうそんなに経ったのか」というFOGが生じ，実際の生起時期よりも現在に近かったことを知ると「まだそれしか経っていないのか」というFOGが生じると考えられる。このFOGはFOG with real date difference という意味でD-FOGと名付けられたが，テレスコーピングによって説明可能である。

他方，2つめは，実際の生起時期を正しく想起できたにもかかわらず生じるFOGである。例えば，阪神大震災が起こった日付を知識として知っている場合でも，その生起時期を改えて言われたときに「もうそんなに経ったのか」「まだそれしか経っていないのか」と感じることがあるであろう。この場合，全体の時間的伸縮はあるわけである。ただ，想起時期と客観的生起時期の間にズレはないので，FOG without real date difference の意味で，U-FOGと名付けられた。これはD-FOGとは成立機序を異にするであろう。

本章の目的は，①このU-FOGの存在の検証と，②FOGが生じる出来事の全般的記憶特性を探ること，③FOGが生じた出来事と生じなかった出来事をその内容に関する記憶特性の点で比較することである。記憶特性をとり上げる理由は，FOGが短時間のうちに生起するところから，記憶特性をよく映し出していると考えられるからである。

まず過去10年間の10大ニュースから32個の出来事を選び，それに対するFOGを，1. まだそれしか経っていないのか～7. もうそんなに経ったのか，の間で評定させ，評定値 4. そんなものだ からの差がt-検定で有意となった出来事を抽出してみると8個得られ，そのうち6～7個が古い時期のものであるところから，昔のことほどより最近に感じるという，順向テレスコーピング同様の結果が得られた。FOGの存在はこのような直接評定でも確認される。

次に，出来事の記憶特性との関係であるが，FOG評定値が高かった出来事9個，低かった出来事9個をそれぞれ高・低FOG群として，この2群を基準変数にとり，同時に評定させた記憶痕跡強度，鮮明度，想起頻度，感情，当時関心度，現在関心度，最近接した頻度，経過時間を独立変数としてステップワイズによる判別分析を行ったところ，FOGには，経過時間が有意に関与していること，有意ではないが鮮明度の関与の可能性も示唆された。

FOGが生じるにはある程度長期の経過時間が必要というのであれば，出来事の生起時期を統制して回帰分析を行えば経過時間以外の要因が引き出せるに違いないと考え，行ったところ，感情変数が有意となり，出来事が起こったときに感情の変化を強くもたらした出来事であったかどうかがFOGに強く影響することが分かった。このようにして著者は意味のある要因を次々に巧み

に掘り出してくる。

さらに，出来事全部についての FOG 値を，9 個の独立変数を選んで重回帰分析をしたところ，やはり経過時間が長く，鮮明度が高く，感情が強い出来事ほど「もうそんなに経ったのか」という FOG が生じることが確認された。宜なる哉である。

第 8 章では，同一の出来事に対してライフスパンのいろいろな時点において記憶の体制化や再構造化がなされているのであれば，特徴的な自伝的出来事をとり上げれば，特長あるテレスコーピングやタイムギャップ感現象が見られるのではないか，そう考えて，「高校卒業時期」と「大学入学時期」という 2 個の自伝的出来事を選び，その FOG を従属変数，鮮明度他 10 項目を独立変数として重回帰分析をしたところ，鮮明度，不安度，さびしさ，経過時間が有意な要因として残った。鮮明度が高く，不安度が高く，さびしさが低く，経過時間が長いほど「もうそんなに経ったのか」という感覚が強くなるというわけである。さらに，これらの時期はよく知っている筈である。それで FOG が見られたのであるから，U-FOG の存在は確認されたことになる。それにしても「入学期」に関わる感情要因に楽しさや充実度が消え落ちているという，回帰分析の結果が示す意味は暗く重い。

第 9 章，研究 6 は，D-FOG と U-FOG を分離することにより，U-FOG の存在をさらに明らかにしようと試みる。ある出来事の生起時期を想起し，FOG の評定を行い，次に実際の生起時期を提示した上で再度 FOG の評定を行う。予測としては，想起時期が実際よりも最近（昔）であった場合には，2 回目の FOG 評定値は〈もうそんなに経ったのか，の方向に〉高まる（〈未だそれしか経っていないのか，の方向に〉低まる），他方，想起年月が実際の生起年月と一致していた場合には 1・2 回目の U-FOG 評定値は殆ど完全に変わらない筈であるし，中立点 4 を越えれば U-FOG の存在が確認されることになる。結果はいずれも予想通りであった。

それにしても実際の生起時期を知っているのに主観的時間の伸長があるというのは一体何故であろうか。データを仔細に見ると，出来事によって FOG が見られるものもあれば見られぬものもある。ということは，我々はどの出来事も同じ過去として捉えているのではなく，出来事によって異なる捉え方をしているということなのであろう。

第 10 章では，出来事の捉え方の違いにより FOG は異なるかどうか，また，第 7～8 章で見たように経過時間が FOG の重要な要因になっているので，経過時間の違いによって FOG の性質が異なるのかどうかも改めて検討することにした。出来事としては自伝的範疇から「人生の転機となった出来事」を選び，その生起年月，鮮明度，その出来事に対する現在の捉え方・感じ方が当時と同じか異なるかについて答えてもらった。結果は，①その転機を境に捉え方が変わった群と同じ群とではどちらも「もうそんなに経ったのか」という FOG が生じており，③鮮明度は両群で変わらない，④当時否定的または中立的であった感情は現在は肯定的である人が多い。⑤捉え方が異なる群では感情の如何にかかわらず「もうそんなに経ったのか」という感覚が得られている。⑥他方，捉え方が変わらない群では肯定的あるいは中立的な捉え方をしていれば「もうそんなに経ったのか」という感覚が生じるが，否定的な捉え方をしていると「そんなものだ」という感覚になる，ことなどが分かった。加えて，⑦客観的経過時間が 6 ヶ月以内では「まだそれしか経っていないのか」，7～12 ヶ月では「そんなものだ」，1 年以上では「もうそんなに経ったのか」という感覚が得られ，客観的経過時間の相違により FOG の性質が異なることが示された。

第 11 章では，政治社会，スポーツ・芸能など 8 項目について，「実際よりも昔に（最近に）感じる出来事例」を挙げてもらう，FOG の素朴理論の検討である。纏めてみると，①「実際よりも最近に感じる出来事」，つまり「もうそんなに経ったのか」は，「自分・現在と関連ある出来事，現在と認識している出来事」であり，②「実際よりも昔に感じられているのは，「自分・現在とは関連のない出来事，現在とは認識していない出来事」である。同じ出来事でもそれをどう捉えているかによって，FOG も異なって来るという。

最後の第 12 章では，これまでの成果を簡潔にまとめ考察を加え，そして，時間的記憶（テレスコーピング・FOG）と自伝的記憶に関し，以下のように総括する。

我々の経験した出来事は過去となる。現在は直前の過去になる。時間は現在から過去へと流れて行くが，我々の人生における時間においては全ての出来事が一様な速さで流れない。はやく過去としてしまいたい出来事もあれば，いつまでも留めていたい出来事もある。Conway & Bekerian (1987) は我々の自伝的記憶は複数の人生テーマによって体制化されているという。尾原・小谷津 (1994) は複数時間軸仮説を提唱しているが，我々の自伝的記憶を彩るエピソード記憶は，過去から未来に向かう一次元の時間軸上に，その生起順序通りに並んでいると

は考えにくい。むしろ，時間軸は複数あって，一つ一つのエピソードは何らかのテーマに従った時間軸上にゆるやかなまとまりを形成し，またそれぞれの時間軸はところどころに，時にぎこちなく接点をもって，変化のダイナミズムを内に秘めながら体制化されており，それが我々の過去，自伝的記憶を構成しているとは考えられないか。

著者は，そう考えることで，FOG の成立過程に関し，正確な生起時期を想起しようとすれば，時間軸同士の接点を参考としながら，出来る。一方で，主観的な経過時間は各時間軸の流れの速さによって判断されると考えるならば，正確な想起と一致する必要はなく，そしてこの不一致の結果として FOG が生じると説明することが出来ないであろうかと結んでいる。

以上，章を追って本論文の概要を述べた。

ここで評価すべきは，著者が最初に手がけたテレスコーピングの研究をそこにとどめず，類縁ともいうべきタイムギャップ感と結びつけ，時間情報の記憶研究にまとめあげた点であろう。著者のセンス，洞察力，論理展開力，そして実行力は十分評価されてよい。結果として得られた一連の実験および調査の成果は，一部の実験（研究 2）で条件別に割り当てられた被験者標本のサイズが十分でなく結果が明確とは言えないところもあったが，他は全て不動である。結論も明解で時間記憶の分野に一石を投じることになろう。

ただ欲を言えば，同一の出来事に対し「もうそんなに経ったのか」と「まだそれしか経っていないのか」という反応の違いには，その人の“パーソナリティ”の関与，被験者の“主体”要因の個人差も考えてもらいたかった。著者の今後の研究に待ちたい。

しかし，論文全体を通じて見るとき，先行研究に関する文献の渉猟といい，実験，調査の運びに関する執拗なまでの展開といい，結果の論理的解釈といい，著者は研究者として一流の水準に達している。また，展開された実験と調査，その設計・装置の準備・実験の遂行・統計解析の緻密な内容等からうかがえるように，本研究は実に丹念に仕立て上げられている。論文の文章はコンパクトであるが，正に労作と言ってよい。

最後に，本研究の評価すべきもう一つの点は，「時間情報の記憶」という基礎心理学的色彩の濃い研究でありながら，「自己の発達と形成」の研究の一部としてこれを行っているところである。そこに著者の視野の広さと，将来を見据える著者の心理学に対するフィロソフィーを観ることが出来る。

以上の所見から，本論文は著者が将来独立した研究者として斯界に貢献することの出来る力量を十分に備えていることを示すものである。よって，著者は本論文により博士（心理学）の学位を授与されるに値するものと認める。

教育学博士（平成 10 年 5 月 13 日）

乙　第 3195 号　内藤俊史

道徳判断の発達の文化的普遍性と文化差に関する研究
——認知論的発達理論の意義の検討と道徳判断文化差に関するいくつかの調査——

〔論文審査担当者〕

主査　慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員　教育学博士　波多野誼余夫
副査　慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員　教育学修士　田中　克佳
副査　埼玉大学教育学部助教授・心理学博士　首藤　敏元

内容の要旨

本論文では，道徳性の発達を，「理性的道徳判断」の能力の獲得あるいは合理的な道徳的討議に参加する一員としての能力の獲得とした。それは，いかなる宗教的信念，価値観をもつ者であっても，道徳的な問題について議論をするときに承認すべきとされる形式的規則にもとづく議論や判断である。このような「理性的道徳判断」という概念は，民族間の対立や国際的協調の必要性が問われている現在にとって，有効な道徳教育の目標であるとともに，道徳性の発達を研究する際の普遍的な枠組みを提供するようにみえる。そこで初めに，この立場をいわば作業仮説または基本的な方針として採用し，この立場にたつ Piaget と Kohlberg による認知論的発達理論の意義と問題をとりあげた。それらは，日本の子どもたちの道徳性発達をみる一つの枠組みを提供する。しかし，文化的な脈絡のなかで道徳性発達を理解しようとする場合，いくつかの問題が考えられる。本論文では，Piaget と Kohlberg の道徳性発達理論の意義をあらためて考察しつつ，異文化にそれらが適用される際の問題点や補わ